

# “言の葉” 仙台“コトノハ”メモリアルホール

青葉山に吹く“風”が国際的文化発信を促す“仙台らしき”観光拠点型シンボルホール提案



■コトノハ広場（屋外広場）  
青葉山頂上から開かれた屋外広場は、訪れた人々が心地よさを求めて「居場所」を発見する機会を、日々生み出します。イベントの仮設空間等は、毎年、築地のアイデアを積みながら、優れた提案メモリアルな日に向けて専門家と共に実現させていくような、この広場で培われたアイデアや技術が、将来、周辺施設施設や交通時の仮設施設や遊歩道としても実装され、「災害文化の共有財産」となります。

＜コンセプト＞  
“言の葉”（コトノハ）とは古来より親しまれてきた美しい日本語です。和歌などでも“心のエネルギー”が溢れ出たものとして感情を示す大切な表現となっています。

本計画では“文化芸術”と“災害文化”この二つが“心のエネルギー”を携り所に融合できるように

そして国際的発信力のある“仙台らしき”を増えより多くの人々の心に開かれているような

そんな「居場所」を“コトノハ”をテーマに添えながら創り出していきます

“仙台らしき”の構築  
“仙台らしき”について、次の5つのキーワードを掲げ、心地よい「居場所」を創り出します。「専門性の高いホール」、「災害文化と芸術文化の融合と発信」、「青葉山頂上と連動した広場づくりと回遊性」、「国際的な観光拠点としての魅力」すべての目標を掲げたしながら、「何處も訪れたくなる『居場所』」を目指します。

- 風：青葉山の“風”を利用した巨大楽器が“体験”や“記憶”を生み出します
- 絆：伊達家の“絆”の物語がシンボルとなり青葉山と一体の“風景”になります
- 集：コロナ後再認識された“集まる”ことの喜びを体感できる“場所”になります
- 時：伝統が育む“時間軸”が“過去と未来、人々、仙台と世界”を結びます
- 紫：表裏の異なる構成による“回遊性”が日常空間と視察空間を“繋ぎ”ます

【風】 - 青葉山に吹く風を想いを乗せて - <コトノハの風>  
訪れた人々は、工作工房で制作された仙台杉の間伐材を利用して“木製楽器”に、未来へのメッセージを書き添うことができます。この“木製楽器”は建物やテラスに風鈴のように吊り下げられ、青葉山に吹く“風”に合わせカラカラカラと音を奏でながら、日々、人々を迎え入れ、送り出します。“心地よいすべての風の目”が“メモリアルな音環境”を生み出し、日常を彩ります。

【絆】 - 人の絆は未来を繋ぐ未来 - <空間のシルエット>  
“太陽”と“月”。この2つは伊達政宗の父、輝夜が我が子の成功と守護を願う「旗印」と「前立て」に採用された題材として現代に伝えられています。こうした“未来への絆の物語”を“風景”の中のシンボルとして、空間のシルエットに“継承”していきます。

【集】 - 包まれるような感覚を共有できる場所 - <ホール>  
包まれるような感覚は、ホール空間にとって最も大切な要素だと考えます。客席の形式として“馬蹄形”を採用し、視座配に配慮しながら、演者と観客との距離感が心地よく“包まれる空間”を構築します。コンサート形式時にも、可動プロセスシアタ、分解型反射板や自在型客席によって“サラウンド環境”を実現し、オーケストラを中心に1期一會の祝祭空間を演出します。

【時】 - 伝統との融合に仙台に暮らしを - <交流/ワークショップ/教育/発信>  
仙台について深く学び、「仙台らしい時間軸」に日常的に触れて貰うことが、仙台の魅力をあらためて再認識するきっかけとなります。災害文化の枠組みとして、“仙台の魅力体験”を推進し、伝統工芸を扱う拠点も、伝統技術の存続と、多角的に仙台らしさを体感できる環境を整え、同時に芸術分野との連携を図りながら、“豊かな文化性”を世界に向けて“発信”します。

【紫】 - 都市広場が仙台市の芸術文化ネットワークの結節点となる - <都市広場/物理文化施設との連携/青葉山頂上の回遊性>  
コトノハな施設計画により付加価値の高い“都市広場”を獲得。仙台市の持つ文化系施設のネットワークの中で“結節点”となり、青葉山に回遊性を生み出し、“多様な『居場所』”を提供します。

